「グループ」の「成員性」をいかに記述するか

—フィールドノーツの分析を事例に—

大阪経済大学 團康晃

1 目的

人々を何者として記述するのかという課題は、社会調査における重要なテーマの一つである。文化研究、オーディエンス研究等では「おたく」等、社会的に注目を浴びた文化集団に注目した調査研究が蓄積されてきた。一方、調査者が注目したカテゴリーを調査対象者となる集団が自認していないという指摘(七邊 2005)をはじめ、調査者の調査対象者に対する設定の問題は繰り返し指摘されている。

このようなフィールドの人々の成員性について、エスノメソドロジストのハーヴェイ・サックスは、人々の実践に目を向け、成員カテゴリー化装置の議論(以下 MCD)(Sacks 1974)として示した。

本報告ではサックスの MCD の議論およびこのアイデアを受けて展開している子どもの遊びの研究(Goodwin 2006 他)を整理し、特に中学校というフィールドにおいて「おたく」であることをめぐる人々の実践について、團(2014)の事例と追加事例を対象に、その方法を明らかにすることである。

2 方法

2009 年に実施した地方公立中学校でのフィールドワークでのフィールドノーツ等を主たるデータとし、概念分析、MCD の議論を、自分たちが誰でどんな行為をしているかを理解可能にする実践の社会論理の分析として捉えた上でフィールドノートの分析をする

3 結果

中学校の「休み時間」において、特に「おたく」として行為を組織すること、あるいはその活動に「おたく」として参加することは、他のメンバーから「おたく」として見られる可能性がある点で、当人たちの社会的アイデンティティの在り方にとって重要な局面となりうるものだった。それゆえに、当人たちは「わかるものにはわかるやり方」で、その行為を組織していた。

4 結論

加えて質的研究における重要な指摘として、前田(2015)がライルの議論を引用して指摘したように、ある行為の理解は「厚い／薄い」記述間の問題であることを確認した。つまり、「おたく」であることを「わかるものにはわかるやり方」で組織する行為は、「おたく」カテゴリーと結びついた知識によって「厚く」記述できるのであり(逆に言えば、その知識を持たない者にはアクセスできないコンテキストがあり)、調査者はその知識を調査の過程で獲得する中で、その行為を理解できるようになる。MCD の議論・概念分析は、このようなフィールドノートの分析に有益なものであった。

團康晃 2014 「学校の中の物語作者たち」『子ども社会研究』20

Goodwin, M. 2006 *The Hidden Life of Girls: Games of Stance, Status, and Exclusion*. Oxford: Blackwell.

七邊信重, 2005, 「文化を生み出す「集団」—オタク現象の集団論的分析から」『現代社会理論研究』15.

前田泰樹 2015 「「社会学的記述」再考」『一橋社会科学』7, pp.39-60.

Sacks, H. 1974 "On the Analyzability of Stories by Children," in R. Turner (ed.) *Ethnomethodology*, Penguin, Harmondsworth, pp.216-232.